

## 障害児のよりよい支援に向けて ——地域ケア・長期ケアのあり方を探る——

その1～障害児保育の現場（障害児を担当する保育士へ）のアンケート～

大 林 博 美  
(ほがらかネットワーク事務局長) 池 田 信 子

Key words : 地域ケア 長期ケア 早期発見・早期治療 地域ケアシステム  
統合保育 保育士 ICF 生活モデル

### I はじめに

地域ケアシステムと長期ケアという考え方がある。

地域ケアシステムとは、在宅の介護や生活支援を必要とする方々に対して、一人一人に最も適するように保健、医療、福祉サービスを組み合わせて提供する高齢者を対象として考えられた仕組みである。

長期ケアとは、慢性的な疾患や進行疾患や障害など生涯を通じて医療・福祉・介護というサービスを受ける側の視点で行われるケアのことをいう。

病気や障害がある子どもにあつては、環境を整えて、よりよい人生を生きていくことができるように長期的なケアが望まれている。

子どもの障害の早期発見は、早期療育や早期発達支援につながるため、検診制度が充実してきた。

筆者は、「乳幼児期に障害や病気を持った人への支援のあり方」や「地域ケアシステム」の構築の必要性を感じて、障害児

の発達支援を目的とした「ほがらかネットワーク」の事務局に在籍している。

「統合保育」の場を障害児の社会生活の第一歩と位置付けたい。保育の専門職である保育士は、地域ケアシステムを構築していく際のキーパーソンになると考える。

その「統合保育」の現状を調査して、地域ケアシステムが必要かどうかを考えてみたい。

WHO（世界保健機構）では、ICF（国際生活機能分類、以下ICFという）により、障害の捉え方が大きく変化している。障害には、機能障害だけでなく、社会に参加できないために起きてくる二次的な障害があり、それは、その国の環境因子やその人の個人因子に大きな影響を受ける。このような障害の捉え方をモデル（以下「生活モデル」という。）として、環境因子に着眼したケアのあり方が注目されている。

この調査は、地域ケアシステムのモデルを構築する上で、ICFの「生活モデル」の考え方を活用したいと考えている。

## II. 研究目的・調査目的

- ① 障害児保育に携わる保育士の現状を知り、保育士の役割や保育士のサポート体制について考える。
- ② 障害のある子ども達を取り巻く状況を知り、発達支援モデルを考える。
- ③ 保護者の現状を知り、保護者のサポート体制を探る。
- ④ 障害児に関わる関連機関の連携・協働のあり方から長期ケア及び地域ケアシステムモデルの構築をする。
- ⑤ コンサルテーションとケアマネジメントの必要性を探る。

## III. 調査の時期

平成17年8月5日～8月30日

## IV. 調査方法

アンケート法 直接聞き取り調査

## V. 対象者及び回収状況と方法

- (1) T市内統合保育を行なっている保育園に勤務する保育士 76名
- (2) 回収率 100% (直接回収)

## VI. 調査内容

質問紙 別紙参照

- (1) 質問の意図
  - ① 統合保育で現実に受け入れをしている対象児の障害の種別の現状把握 (質問1)
  - ② 対象となる子ども達の状況把握をした

上での保育か否か。(質問2)

- ③ 障害児保育 (統合保育) 現場での問題点を追究する。統合保育をよりよい方向へ導くための課題点を具体化する。(質問3)
- ④ 障害児保育 (統合保育) の目的と対象児の理解の現状を把握する。(質問4・5)
- ⑤ 保育士自身の相談体制を知る。障害児を取り巻く社会資源への保育士の認識と社会資源の実際の結びつきを知る。保育士の環境因子を具体化する。その影響を特定する。(質問6・7・9)
- ⑥ 障害児保育の現場環境の向上。統合保育をする中での必要な支援の特定をする。(質問8)
- ⑦ 統合保育の現状と課題の特定をする。(質問10)
- ⑧ 障害児に携わる保育士の資質向上と自己研鑽への意識調査 (質問11・12)
- ⑨ 障害児本人の直接的な環境因子である家族への働きかけの現状把握。また、その働きかけと障害児の活動レベルへの影響を探る。(質問13・14)
- ⑩ 障害児の保育現場での課題や問題を具体的に明確化する。(質問15)
- ⑪ 保育現場から発信 (質問16)
- ⑫ 障害児の支援のあり方について他領域、他環境への提言 (質問16)
- ⑬ 社会資源は使われているか (質問16)
- ⑭ 障害児は生涯を念頭に入れた地域創りの提案と可能性 (質問17)
- ⑮ 地域に自分の楽しみが持てる環境づくりの提案と可能性 (質問17)
- ⑯ サポートシステムの充実の提案と可能性 (質問17)
- ⑰ 障害児者が利用できる社会環境の整備、開発の提案と可能性 (質問17)

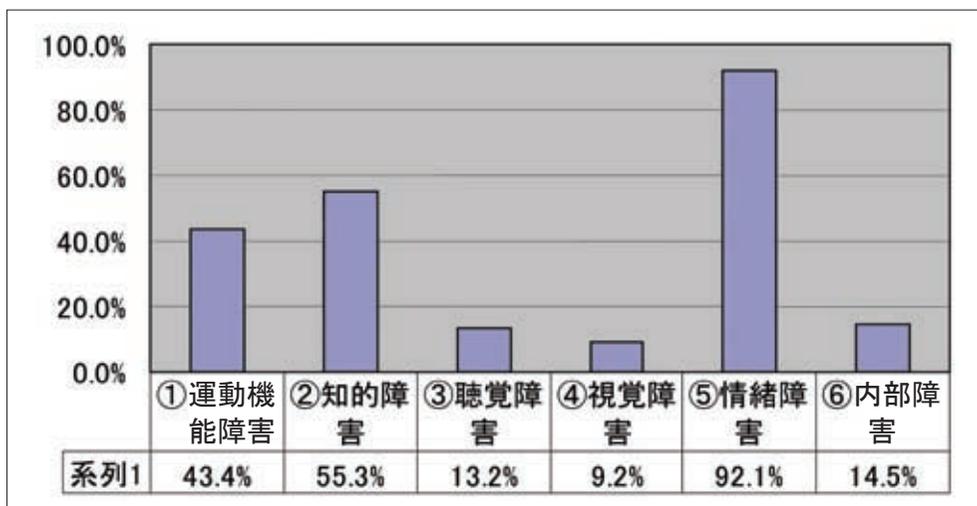


図1 障害の種類（複数回答）

について、探る。

## VII. 調査結果及び考察

### ① 対象児の障害の種別（重複回答）

図1で示すように、「情緒障害」が最も多く92.1%を占めている。次いで、「知的障害」が55.3%、「運動機能障害」が43.4%である。最も低いのが「視覚障害」で9.2%であり、次いで、「聴覚障害」が13.2%、「内部障害」は、14.5%となっている。

以上のように情緒障害、知的障害が多いため丁寧な関わりが必要である。

### ② 入園前の事前の診断

事前に診断され入園してくるかどうかについてみると、図2で示すように9割が障害が明確になって入園していることがわかる。また、調査を受けた保育士が担任した子どもが事前に診断を受けていても、図3で示すように、「親の受け入れが困難」が23.7%、「気になっているがいいだせない」

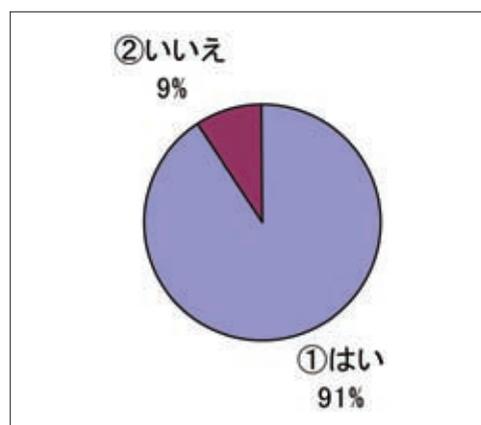


図2 診断が事前にされていたか

が6.6%となっている。一方、「受診を勧める準備段階」が11.8%となっている。

以上のように検診システムの充実と、障害児を受け入れる体制のアンバランスが生じている。

### ③ 子どもの問題行動が悩み・相談者は同僚が多い

障害児保育（統合保育）現場での問題点は、図4に示すように「子どもの問題行動」が56.6%と半数を占め、次いで「クラスの

障害児との関わり」47.4%、「子どもとの関わり」が40.8%となっている。

先述したように対象児は「情緒障害」が多い。身体的な障害でないため誤解を受けたりされやすい。保育士としても対応がはっきりさせられず「子どもの問題行動」として発展させてしまい、辛い思いをさせる事もある。

現在の状況（保育園の環境）は対象児の生活の場として適当であるかどうかについて

てしてみると、図5に示すように「はい」が45%、次いで「どちらともいえない」が36%、「いいえ」が19%となっている。また、悩み事相談者の有無は、図6に示すように、「相談できる相手がいる」が93%となっている。

その相談領域については、図7に示すように、同じ職場の「職員」が90.8%と同職種が圧倒的に多く、「友人」が40.8%、「対象児の親」が32.9%、「他職種」が23.7%、

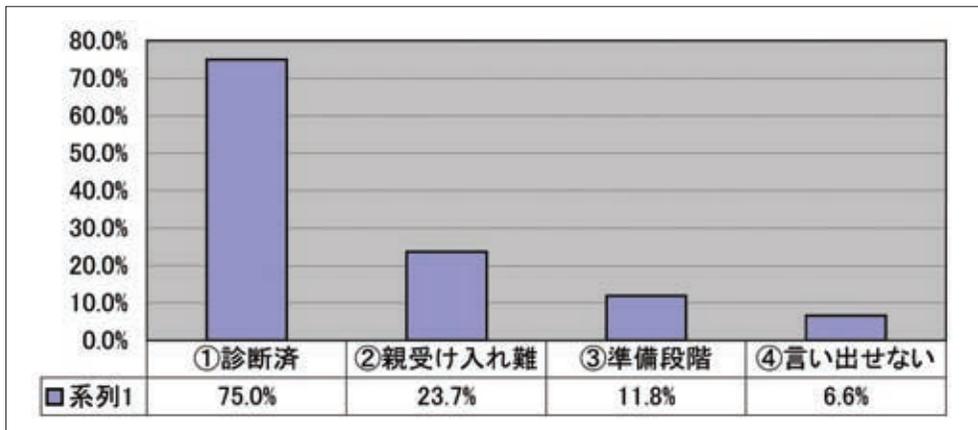


図3 担任した障害児の診断状況

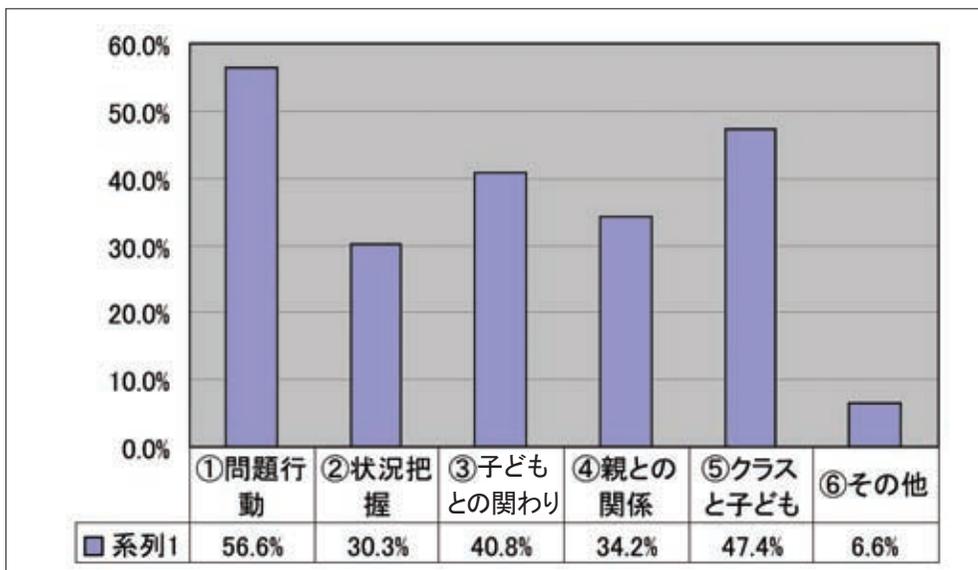


図4 現場保育の問題点

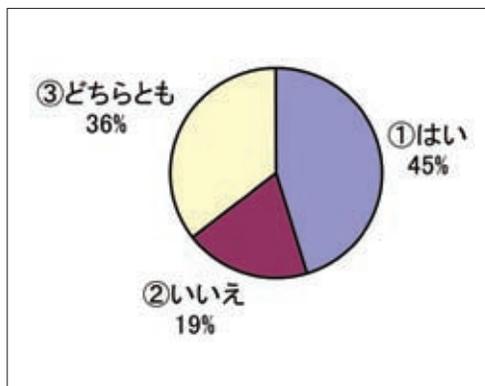


図5 園の子どもの環境

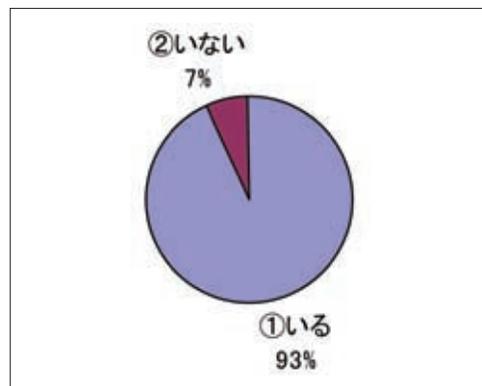


図6 相談相手

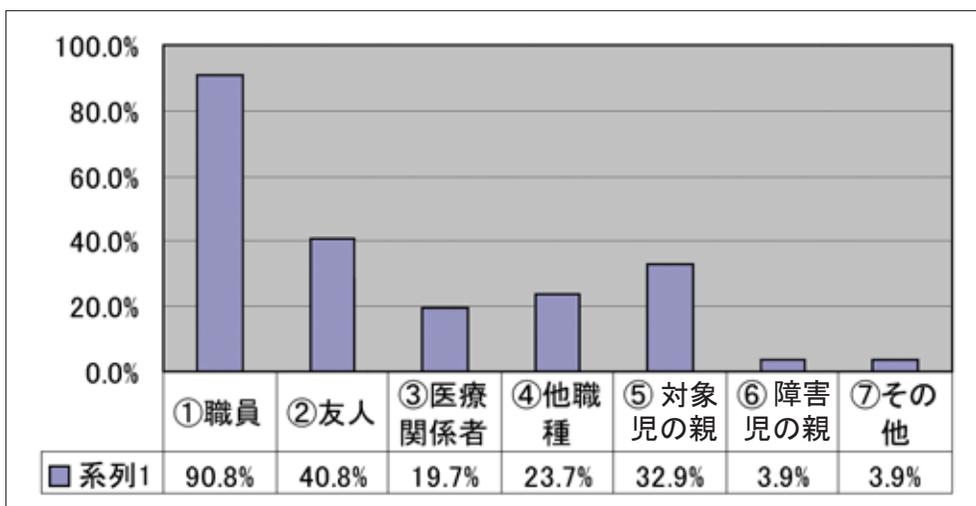


図7 相談領域

「医療関係者」が19.7%、「他の障害児の親」及び「その他」がそれぞれ3.9%となっている。

④ 発達支援に必要なことは、「園の協力体制」90.8%、「関連する業種との情報交換」は50%

発達支援に必要なだと感じることは、図8で示すように、園内の「協力体制」が90.8%と最も多く、次いで「知識の向上」が86.8%、「親との面接」72.4%、「関連する業種との情報交換等」67.1%、「障害児

支援のシステムづくり」32.9%、「親の会の充実」18.4%、「その他」3.9%となっている。

障害児保育の充実のためのネットワークは、図9で示すように、「医療関係者」23%、「園の職員」19%、「他職種」18%、「対象児の親」16%、「障害児・障害者団体」9%、「友人」8%、「対象児以外の親」7%、「その他」0%となっている。

以上のように十分ではない物的環境と人的環境の中だからこそ、「身近な相談者」と「専門職」とのつながりが、子どもの発達支援となっている。

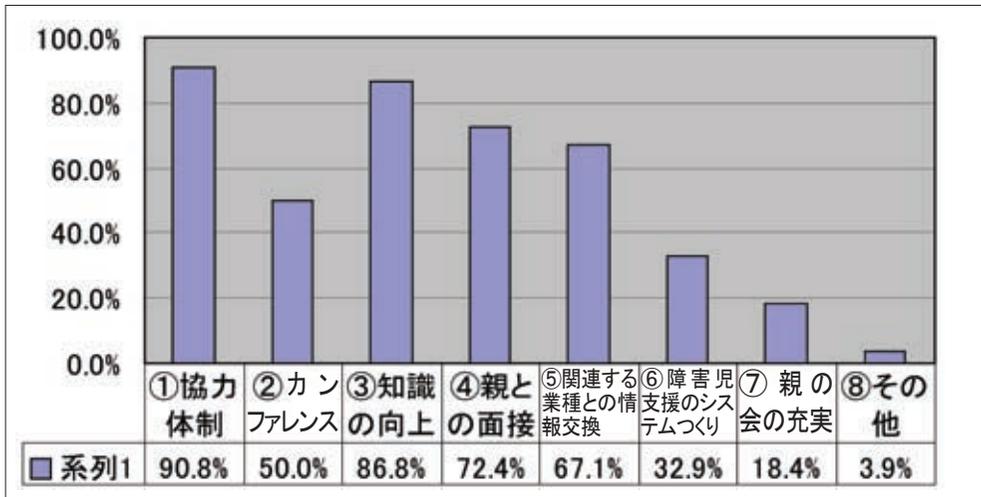


図8 発達支援に必要なこと

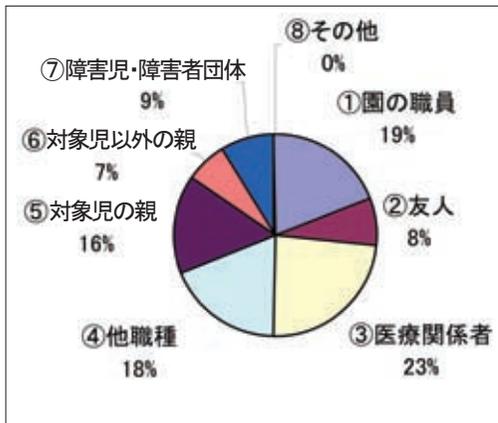


図9 障害児保育の充実のためのネットワーク

⑤ 他分野とのつながりは、生活の質の向上と生涯にわたる長期ケアの第一歩

他分野とのつながりの効果と今後の方向性は、図10で示すように、「今のつながりが役に立っており、更に連携していきたい」が78.9%、「つながりを維持していきたい」11.8%、「今後連携を考えていきたい」が3.9%、「今後連携を考えていない」が0%となっている。

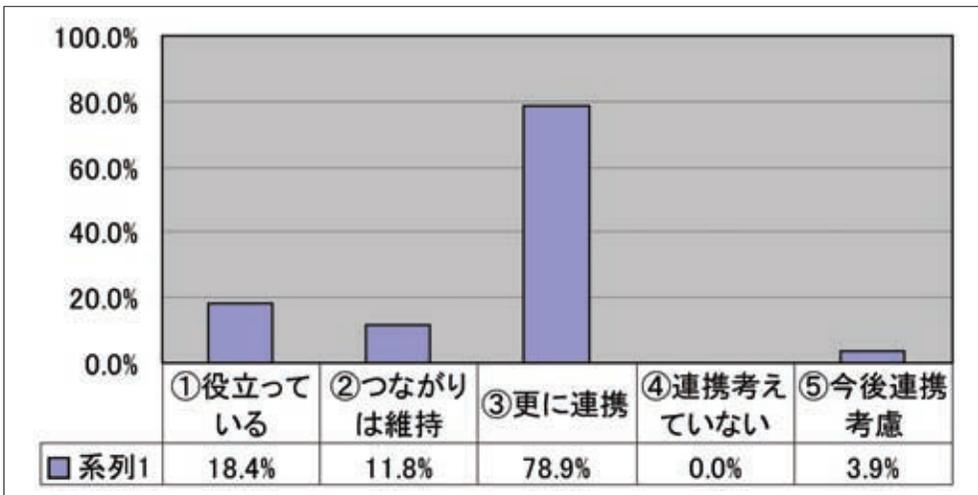


図10 他分野とのつながりの効果と今後の方向性

⑥ 研修への参加は9割、自己研鑽は6割

研修などへの参加状況は、図11で示すように「はい」が92%、「いいえ」が8%となっている。

自主的な活動状況は、図12で示すように「はい」が64%、「いいえ」が36%となっている。

⑦ 家族への援助は、図13に示すように「はい」が36%と全体的に少ないが図14に示すように、関わっただけの変化は「ある」は、85%となっている。

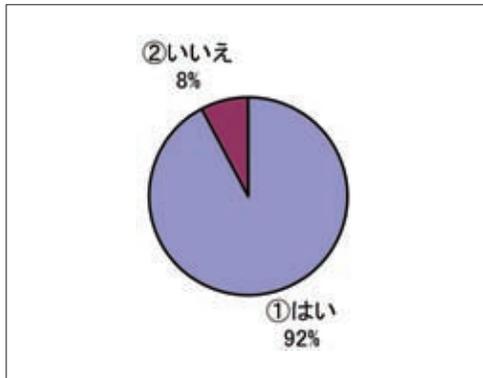


図11 研修会などへの参加状況

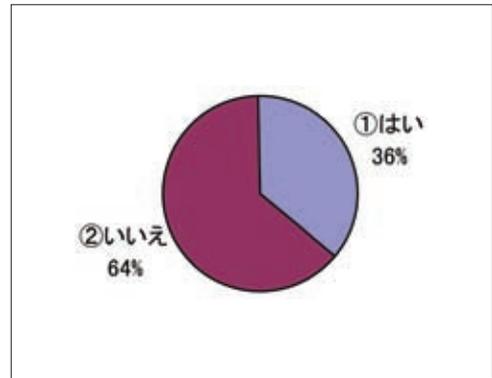


図13 家族への援助

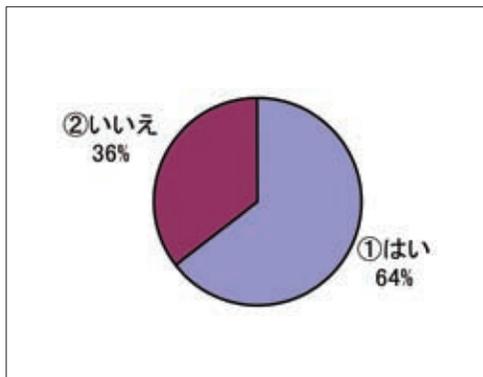


図12 自主的な活動状況

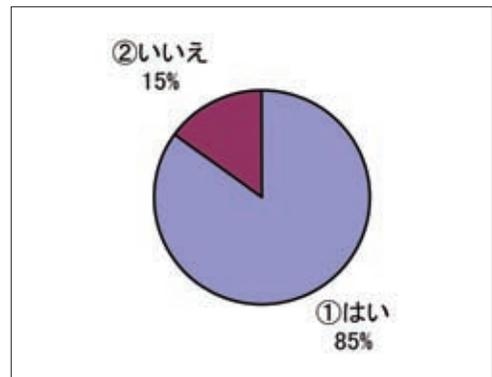


図14 変化の有無

## ⑧ 保護者への働きかけ（支援）で困っていること苦勞していること

表1 保護者への働きかけ

1	保護者の理解がかなわず、受診を勧めてから半年の年月がかかった
2	保護者が子どもの障害を受け入れようとせず、保育園や担任との信頼関係に時間がかかった
3	外国籍の子とうまくコミュニケーションが取れない
4	保護者の受け入れが出来ないため園での特異行動などの理解をしてもらえなかった
5	医療機関との連携が取れなかった
6	保護者との関係が難しい
7	慎重に保護者と関わっている
8	就学時の進路選択へのかかわり
9	保護者から聞くドクターの見解と園での様子にギャップがある
10	就学時の選択
11	保護者自身が自閉症ではないかと思われる
12	保護者が本人の特徴を気にしていないので気付いてもらう働きかけが難しい
13	家では出来ているのに……と保護者は障害を認めない
14	家庭環境が特異で母親と話す機会がない
15	就学時の進路選択へのかかわり
16	保護者へ園の様子をうまく伝えられなくて
17	子どもの様子を話しても素直に受け止めてもらえない
18	保護者との連絡の取り方
19	保護者との信頼関係の築き方
20	保護者とのかかわり
21	保護者との信頼関係の築き方
22	保護者が認めたくないときの働きかけの仕方
23	保護者がしっかりと受け止めてはいるが、過度に心配すぎる
24	保護者の心的なケア
25	保護者の要求と園の指導のギャップ
26	子どものありのままを伝えられない
27	障害児本人への保護者の過度な心配
28	保護者が障害児しか育ててないと健常の発達の事が見えなくてなんでも心配になる
29	対象児への対応を試行錯誤
30	保護者がありのままの報告を聞いてがっかりするんじゃないかと
31	グレーゾーンの子の保護者への言葉がけ
32	親の子どもに望むことと園の働きかけのねらいのズレ
33	親に我が子の障害を認めてもらうこと
34	対象児の問題行動を問題行動と気付いてもらうのが難しい
35	保護者の要求が高く、本人が負担になっていると思われるとき
36	保護者が障害に気付かず手が掛かると感じているだけのとき
37	保護者がうそをついて高い評価をしている時の言葉がけ
38	対象児の姿を見つめていく難しさ
39	園と自宅の対象児のギャップが大きいと思われるとき
40	対象児が楽しいと思える環境づくり
41	保護者とのかかわり
42	出来るだけの要求に応えたかったが、要望が強くて無理なこともあった

## ⑨ 障害児をとりまく状況の現実を感じるころ

表2 障害児をとりまく状況の現実を感じるころ

1	専門知識の不足
2	統合保育の中での環境構成
3	グレーゾーンの子の増加による受け入れ側の体制
4	障害に関心を持つ方が少ない
5	障害と交流できる環境が日常あふれているといい
6	周囲の理解受け入れ
7	周囲の障害への理解が少ない
8	世の中の障害に対する認識が乏しい
9	低い福祉の水準の日本
10	障害の（とらえ方が）理解不足
11	一見わからないような中間層の子達がまわりの理解を受けられない
12	他害をする子から目を離さないようにしているが完全にその子の行動を把握し切れない
13	異質の子どもたちがいるまわりに影響を与えてしまうのではないかとと思っている
14	社会の偏見が根強い
15	気付かれない障害のため誤解を受けたり、保育士としても対応がはっきりさせられず本人に辛い思いをさせたと思う
16	障害児が大きくなって障害者となっていくときまでに何か出来ることはあるのか
17	地域や専門、医療関係の連携がもっと必要
18	境界線の子が年々多くなってきている。見極めて援助していく難しさを感じる
19	子どもの特徴を個性と見るのか……
20	保育園だけではなく専門機関との連携が必要だと思う
21	今は「広汎性発達障害」と幅が広がったことで身近になった気がする
22	障害児への関心が本人と保育士だけではなく広がってきているように感じる
23	健常児の中で過ごすのはいろいろな刺激があつてよいと思う
24	加配が付いているが園生活の中で健常児と過ごすのは難しいところもある
25	健常の子は優しさを障害児は多くを学ぶ
26	健常児が障害児を全面受容していてどこまでが許容範囲か
27	障害とみられることが親の接し方にも問題があるように思う
28	ありのままの子どもの姿を受け入れていきたい（長所短所を含む、ありのまま、存在全てを……）
29	障害は早期発見、早期治療といわれているが年齢が低いとよく分からないところがあり、現状をどう親に伝えたらいいのか
30	子どもが安心できる状況をいつでも作っておく
31	昔なら「ちょっと変わっている」くらいの子が「軽度発達障害」といわれている。そのような子がたくさんいる
32	実際には特に受診しているわけでもなく（診断名を頂いているわけではなく）、健常児の集団の中にいる。ギャップと対応が難しい
33	障害児という認識が一般化してきている
34	障害の理解者も増えてきている
35	障害ととらえられていることがその子にとってよい状態になっていると思われる状況もある（育ちとかの問題ではなく）
36	保護者や教育者や保育者が学ぶ機会を増やしていくべき
37	障害の受け入れが以前と比べ充実してきている（小学校、保育園）
38	障害児の親のわがままも通りやすくなってきている

39	母子関係に関して考えられる場が欲しい
40	就学に関親の希望が通りやすくなった反面、子どもにとって何がいいのか見えにくくなった
41	親だけ、園だけではなく家庭も園も医療機関も地域も4人5脚という気持ちがあってもいいと思う
42	親-園-医師の連携が大事だが、ドクターの数が少ない、いないので受診ができずその後がうまく進んでいかない
43	保育園の入所が定員増になっており、1クラスの集団が以前に増して多くなってきている。ゆったりした環境にないので障害児にとって過ごしにくい。
44	小集団としてのゆったりした空間を保障できる物的環境の充実が望まれる
45	障害者、健常者まだまだ壁がある

### ⑩ 障害を持っていても地域で暮らしやすくなるための提言（自由記述）

表3 障害を持っていても地域で暮らしやすくなるための提言

1	親のネットワーク（支援団体）が社会に活動をアピールし一般の人々の理解を得、市の広報なども利用しつつ地域の人と交流する機会を作っていく
2	障害を持っていようがなかろうが、生まれた地域で社会人になっても生活できるように行政の関わりが大変に必要。市民団体とも連携し、地域から見直していく必要がある
3	施設をより市民の身近に作るなど、もっと触れ合える機会を（山中ではなく町中に）
4	障害児が増えている中、特殊クラス、療育センター、学校卒業後の就職先で豊橋はまだまだ支援制度が不十分だと思う
5	障害についての理解を進め、障害を持った人が暮らしやすい町にしていけたら……
6	地域で温かく見守り、協力していくことが大事
7	地域に住む人たちがみんな障害を持つことに偏見を持たずに障害を理解すること
8	地域の人、社会全体へ障害というものの理解を深めてもらうように働きかける
9	境界線を引くのではなく、偏見、世間体だけではない正しい知識を育てていきたい
10	もっと身近に障害を持った人と関われる交流の場があればいいと思う
11	多くの人が「障害児」「障害者」を個性として心から受け止められる世界がまず一歩で、そこから色々なことへつながっていくと思う
12	回りの理解が第一
13	特別ではなく、クラスの一人、欠かせない一人として関わるのが大事
14	今の社会ではあるがまます受け入れることが難しい。子育ての見直し、よいこと悪いことの区別の伝え方は必要
15	障害についての知識、理解を地域全体で高めていくこと
16	障害児親の会の充実
17	担任の先生、周りの保護者の理解
18	回りの理解
19	障害に対する知識を持ち、障害児（者）の理解をすること
20	困っていたら優しく声をかけること
21	誰もが障害についての知識を持つこと
22	障害への理解

今回の調査から、保育士が現場で個人が抱える問題としての限界を感じ、資質向上（園として個人として）の模索をしているようである。

また、障害児の受け入れに対する戸惑いや、あまりに多くの時間と労力を費やしていることへの負担を感じているようでもある。しかし、それでも「療育」と「保育」の相互関係をうまくバランスとろうと努めている姿が窺えた。

障害児の発達支援体制は、①ケアする人をサポートする体制②障害児自身をサポートする体制③親をサポートする体制を長期的に地域の中で構築していくことが必要である。

## VIII. 終わりに

誰でも、その人らしく地域で安心した生活を送ることを支援することが福祉職の役割である。長期にわたり医療ケアを必要とするといわれる「障害児」への対応のあり方が、障害児療育および障害児教育の重要な課題となっている。

子どもたちの生命や健康を守り、さらに生命の質の向上や生命活動の充実を図ることが両者に共通した大きな課題となる。かつて、情緒障害は、幼児期に発見されることが少なく、保育園では入園後に気になる子どもとして保育士の目にとまり、手におえない子どもとして退園せざるを得ない状況にあった。現在は、統合保育の広がりや親の願いと早期発見できる環境が整い、障害児が入園してくるケースも多くなっている。

しかし、障害がわかり入園してきても、親の期待も大きく、障害児本人にもストレ

スとなることも少なくない。また、少子化による園経営も手伝い、障害児保育の体制も整わない中で、障害児が受け入れられている。

しかし、現場の保育士の自己研鑽や研修から、医療と保育や教育が連携し、障害児保育の環境を整えようとする知恵と工夫がなされている。この環境を整えるのが保育士の役割であるが、保育士の支援体制が障害児の発達を支援するシステムのはじまりではないかと考える。

障害児は健常児と同様に10年経つと思春期を迎え、体の変化に伴い、乳幼児期ではみられなかった環境への不適応から様々なことを引き起こすことが少なくない。障害のある子どもの生活の質は、障害児の成長発達や生活環境の変化に対応したケア方法が、「継続的に」「再調整」されていく「システム」を構築することで向上するであろう。

障害児の「自立」のためには、医療と保育や教育が専門性を発揮し、地域福祉も一体となって連携し、保護者のみに支えられていた軸足を社会にシフトすることで、彼らの生活を同等に維持しサポートすることが不可欠であろう。

なぜなら、特定の者による保育や介護で対応すると、障害児とその家族の健康と生活の維持が困難となるからである。





10. 問9 のことが現在行われていますか？また、今後行われる予定はありますか？  
(当てはまるものを○で囲んでください)
- ① 現在も他分野とのつながりがあり保育に役に立っている。
  - ② 分野によりつながっているところもあるので、しばらくはこのままでいいと思う。
  - ③ 分野によりつながっているところもあるが、この先はもっといろいろなところとの連携を深めていきたい。
  - ④ あまり取り組みしていないし、今後も考えていない。
  - ⑤ あまり取り組みしていないが、今後は何らかの方向から他とのつながりを持っていきたいと思っている。
11. 障害児保育に役立つことをしていますか？  
(例えば研修会に参加する、検討会をしているなど)
- ① はい
  - ② いいえ
12. 問い11のうち、自主的な活動はありますか？(園からの強制ではなくて、自主参加の活動)
- ① はい
  - ② いいえ
13. 保護者への支援についてお聞きします。対象児ではなく、その家族への働きかけは、十分であると思われますか？
- ① はい
  - ② いいえ
14. 保護者への働きかけ(支援)をすることで、対象児にいい変化があらわれたことがありましたか？
- ① はい
  - ② いいえ
15. 保護者への働きかけ(支援)で困っていること苦勞していること(困ったこと、苦勞したこと)を教えてください。
16. 障害児をとりまく状況の現実を感じるところをお書き下さい。
17. 障害を持っていても地域で暮らしやすくなるための提言(自由記述)